知覚における同一性と差異

— フッサール『物と空間　講義 1907』を手がかりとして —

小　熊　正　久

序

知覚において物はどのように現れているか。われわれはたいていの場合，物の有様に関心をもっていて，物の現れ方のほうに注意を払うことはない。その結果，ともすれば，知覚とは単に外界の物事の姿をそのまま写し取ることであると考えがちである。もちろん，知覚に関しては，「知覚がどのように成立しているか」という問いも重要であるけれども，小論の主題はそのことではなく，「物はどのように現れているか」，ということであり，それを変化と不変化ないし同一性と差異という観点から考察することである。われわれはこの問題をすでに解決済みであるかのように考えてしまうことが多い。古代の原子論者は事物から小さな像のごときもの（エイドーラ）が発散し空中を飛んでわれわれの眼の中に入り，魂に取り込まれることによって視覚が成立すると考えたと言われている。こうした説明を嘲笑するのは簡単であるが，実はわれわれも知覚を考察する場合にも知らず知らずのうちにこうした図式にとらわれてしまうことが多い。すなわち，知覚を「心の中で一枚の絵画を所有する」とでも表現されるような事柄とみなしてしまうのである。そうすると，「物はどのように現われているか」という問題は消えてしまうが，振り返ってみると，実はこうした言説において「知覚」については何も語られていないし，何の説明もされていないことに気づくのである。

何の動きも感じられないしんとした小部屋のなかで壁にかかっている絵を眺めているという状況を想像してみると，そこでは，部屋や絵画だけでなく「知覚そのもの」にも変化がないように思われがちである。だが，その想像では「知覚」という活動が考慮されていないだけである。実際の知覚に少しでも注意を向けてみれば，静止している絵画を知覚する場合にも，その知覚活動には無数の変化があるということに気づく。動かないものの知覚も変化するのである。「動いている風景」に関しても，それが知覚される際には物の動きがそのまま映しだされているように思われるかもしれないが，静止している物の知覚におとらぬ知覚の変化が起っていることであろう。

知覚活動に多くの変化が含まれているとすれば，知覚とは心の中に一枚の絵画を所有するようなことだなどとは考えられないであろう。たしかに，知覚の一過程において一枚の画像のご

ときものが構成される段階があるという考え方は成り立ちうるかもしれないが，この考えを文字通りに受け取れば，再び，知覚が成立するためにはその構成された画像を知覚する必要があることになり，説明は循環的にならざるをえない。小論では，こうした説明を斥けつつ，知覚において「物はどのように現れているか」を問うこととしたい。

言うまでもなく，フッサールは物が意識に対してどのように現れるか，という上の主題に自覚的に取り組んでいた。たとえば，1913 年に公刊された『イデーン　第一巻』では，現象学の課題としての「構成の問題」について以下のように述べている。

> 「統制があり必然的に相属して現れるものの統一を成している現出の諸系列は——それの無限性にもかかわらず——直観的に通覧され理論的に把握されうる」，また，「統一としての特定の現れるものと特定の現出の無限の多様との相関の法則的な能作は十分に洞察されうる」[1] と。

そこで，フッサールの分析を手がかりに上の問題を考察することとしよう。ここでのフッサールの表現を使えば，その課題は，「現出の無限の多様」とはどのようなことなのか，また，「統一としての現れるもの」をどのように理解すべきか，ということになる。こうした点を検討するにあたり，われわれは，フッサールの講義録として公刊されている『物と空間　講義 1907』[2] を導きの糸としたい。フッサールは，1901/1902 年の『論理学研究』公刊後の 1907 年夏学期にこの講義をおこなった。ここでは，『論理学研究』第 5・第 6 研究で手がけた知覚の分析がさらに進められており，また，同じく 1907 年の夏学期，この講義に先立って行われた『五講義』において述べられた「現象学的還元」という現象学の方法が適用されている。『物と空間講義 1907』の内容はのちの『イデーン　第一巻』や没後に公刊された『イデーン　第二巻』[3] などの素材ともなるものである。こうして，『物と空間　講義 1907』はフッサール現象学における事物の現出という主題に関して特別な重要性をもつのである。

さて，その講義での知覚論の重要な観点の一つは「同一性と差異」ということである。知覚について「同一性」や「差異」が問題になる理由は，見える風景において何らかの「同一性」が認められなければ，「知覚」すなわち「何かが見えること」が成立しているとは言えないように思えることにある。一般に視野のなかに或るものが見えるという場合，それが何らかの仕方で「一つのまとまり」として見えるということを意味するであろう。たとえば，ディスプレイにいろいろな色の形が次々と変化しながら映しだされているとしよう。このような場合，あまりに変化が大きく急激で無秩序であるとすれば，そこに特定の形や色が見えるとは言えないであろ

1　*Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch.*, Husserliana Bd III., 1950, § 150.（邦訳，『イデーン　純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想 I-II』，渡辺訳，みすず書房，1984，第 150 節）。なお，引用の際の強調は小論筆者による（以下同様）。

2　*Ding und Raum Vorlesungen 1907.*, Husserliana Bd.XVI., 1973, den Haag.　以下，この書からの引用ないし参照箇所は，節番号あるいは頁数で示すこととする。

3　*Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch.*, Husserliana Bd IV.（邦訳，『イデーン　純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想 II-I 構成についての現象学的諸研究』，立松他訳，みすず書房，2001）。

う。このように，形や色やあるいは模様などにおいてなんらかの同一性（不変性）が存しなければ何かが「見える」とは言えないように思われる。そこで小論では，フッサールの見方に従い，最低限何らかの意味で同一なものが見て取られる場合に「知覚」が成立するとみなすこととしよう。

フッサールは「知覚」や「想像」，「単なる思念」といった意識作用を「志向性」ないし「対象性への関係」と呼ぶが，以下の言葉は，彼の思想の中での「志向性」と「同一性ないし差異の意識」の関連の深さを示している。

> 「一つの対象性への関係は，［対象を同一物と見る場合］同一性の意識を基礎づけ，まさしくそれによって差異の意識を排除し，そしてまた［対象を他から区別する場合］差異の意識を基礎づけ，まさしくそれによって同一性の意識を排除するということのために適切な知覚を行うという，知覚の本質の固有性である」[4]。

こうしてフッサールは，「同一性」と「差異」を知覚の成立のための重要な契機と認めている。

フッサールの分析をみるまえに，小論で問題になる限りで，「同一性」および「差異」の意味と事象との関連を一瞥しておこう。

一

まず「同一性」と「差異」の意味については，「差異」とは「同一性」の否定（「同じでないこと」つまり「異なること」）と解されるが，さらにそれは，「異なり」や「どのように異なるか」，「どれほど異なるか」ということをも意味すると思われる。また，「同一性」のほうは，「差異の否定」つまり「差異がないこと」を意味すると言えよう。なお，フッサールは「多様な」，「さまざまな」という意味の「mannifaltig」という形容詞を使うが，これは「差異」のみられる物事やその「異なり」を示すもの考えられる。次に「同一性と差異」という対と「不変化と変化」という対の関連については，後者は時間的契機を含意しているが前者は必ずしもそうではないと言えるであろう。「変化」とは，時間の中で物事が或る状態から異なる—「差異」のある—状態に変わることだと言えるが，時間的含意を含まない二つの物事についても「差異」を語ることができるからである。たとえば，変わらないものや変化を含意しない物事の色や形，さらに，論理的関係や意味についても「同一性」や「差異」ということが言えるであろう。なお，「相違（違い）」や「区別」という語が「差異」とほぼ同義に使われるが，小論では，「相違（違い）」を「差異」の同義語として扱い，「区別」を「差異を見出すはたらき」と解する。

こうして意味の上で否定的に対立するとみなされる「同一性」と「差異」は，事象に関していろいろなかたちで成り立つ。「差異」が少なくとも二つの状態や事柄の「差異」であるとすれば，その二つの状態はそれぞれ「同一の」状態ないし事柄でなければならない。もしこのことが成

4　cf. *Ding und Raum Vorlesungen 1907.*, § 11.

り立つとすれば，「差異」は「同一性」を前提にすると言えるであろう。こうした関係は「それぞれ同一の二つの事柄の差異」というように表現されるであろうが，そのほかに，二つの事柄について何らかの共通性があるという点で，あるいは，二つの事柄が同じクラスに属するという点で「同一性」が成り立つ場合もある。前者は「差異に共通する同一性」，後者は「差異を覆う同一性」と表現できるであろう。

以下では，物の知覚という事例に即して，どのような点で「知覚」が「同一性」と「差異（変化，多様）」を含むか，また，そうした事態がどのように成立しているかを考察するが，とくに「差異を覆う同一性」という意味での同一性が，「変化をとおしての同一性」として，重要となろう。

二

一般に知覚において「同一な何か」が見てとられていることが確かだとしても，その「何か」は，同じ色や形であったり刻々と変化する色や形であったりと，さまざまな事柄でありうる。われわれはまず，フッサールが典型としている事例に即して彼の知覚や知覚対象の分析方法を考察しておきたい。さらに広範な事例の分類はのちに試みることとする。彼の典型例とは，たとえば同じ家や同じテーブルといった「一つの同じ物」を「知覚する」ということである。その場合にはそれぞれの瞬間ごとに「知覚作用」は異なる（変化する）が，その知覚諸作用をとおして「一つの同じ物」（「同一物」）が知覚されている。

> 「たとえば一軒の家の諸知覚はその実的内容［知覚作用そのものに属している内容］の点ではきわめて異なっているが，同一の家の諸知覚である。……或る場合にはその家は正面から見られ，別の場合には裏面から，そして，或る場合には内側からそしてまた別の場合には外側から見られる」[5]。

フッサールは，こうした事例について，そこでは「同一性の意識 Identitätsbewußtsein」がはたらき，それは，「それらの対象を同じ一つの対象として意識させるが」，「それらの知覚を同一視して同じ知覚として評価するのではない」と言う。

もちろん，この「同一性の意識」は，対象が「同じ物」であることを絶対的に保証するわけではない。たとえば，或る机を見てから自分の背後を眺め，再び以前の場所を見て，そこにあるのは先ほどの机であると判断したとしても，のちにそれらは実は違う机であることが判明したということもありうる。こうした誤りを避けるために中断することなく見続けるということも考えられるが，錯誤の可能性はつねに残る。けれども，そうした可能性があるとしても，われわれが変化する知覚のなかで或る対象を「同じ物」と認めることは確かであり，少なくとも日常において同一物を認める手段は知覚である。フッサールはこの「同じ物と認めること」を「同一性の意識」というのである。言うまでもなく，この意識は，二つの知覚や表象を紐で物理的に結合

5　id. §10.

するような物理的結合ではないし，「一頭の象」と「一個の石」といった任意の二つのものの表象についてこの意識が成立するわけでもない。けれども，しかるべき場合にはわれわれは「同一性の意識」を遂行していると言ってよいであろう。

以上では，一つの対象を全体として同じ物であるとする事例を扱ったが，或るものを同じ家の部分として，また，一連の並木の成員として，箱の側面としてなど，全体としての物の部分をなす特徴ないし性質として把握することも多い。こうした場合には「全体」と「部分」のそれぞれの「同一性の意識」に加えて，それが「同じものの部分である」という意識がはたらくし，場合によっては，諸部分は相互に異なるが全体としては同じであるという「区別の意識 Unterschiedbewußtsein」と「同一性の意識」が一緒にはたらくこともある[6]。

さて，フッサールは，物を一まとまりのものとして見るということをこうした「同一性の意識」の存在によって説明するのであるが，この意識の内実はどのようであろうか。

その解明のために，フッサールは知覚作用を分析し，そこに「感覚内容 Empfindungsinhalte」と「意味的な統握 Auffassung」という二つの構成契機を認める。たとえば私の側から見える机の感覚的な現れという「感覚内容」が，「机」，あるいは少なくとも「一つの物」として「意味的に統握」され，「知覚」が成立するというのである。「感覚内容」は「多様である」のに対して，意味的な「統握」が「同一性」を成り立たせるということになる。

だが，「感覚内容」とはいかなるもので，いかなるあり方をしており，どのようにして同一性を担う意味的「統握」と関連するのであろうか。

まず，「感覚内容」の存在を認める根拠ともなっている，物の「本来的な現出」と「非本来的現出」の区別についてみておこう。

物が知覚される際に，実際に見えている部分が「本来的現出」と呼ばれ，物の裏側などのように「見られていない部分」が「非本来的現出」と呼ばれている。知覚される物が全面的に現れることはなく，物の知覚的現出は必ず「本来的現出」と「非本来的現出」の部分に分けられる。こうした現れ方の差異があることによってはじめて諸現出は「同じ物」の現出とみなされるわけであるから，「非本来的現出」も物の現出全体や「同一性の意識」にとって不可欠である。だが，「本来的現出」と「非本来的現出」の違いを成立させているのが，前者に対応し後者に対応していない「感覚内容」であると考えられているのである[7]。

こうして，「感覚内容」の存在が認められており，この点は首肯しうるとしても，そのあり方には注意が払われなければならない。「本来的現出」と「非本来的現出」の区別は知覚作用の時間的状況を顧慮すれば文字通り流動的であるからである。だが，この点は小論後半でみることにしよう。

6　cf. id. §12.
7　cf. id. §16, §40 (S. 143).

次に,「感覚内容」と「対象およびその契機」とが峻別されていることに注意しなければならない。たとえば,「外的知覚の内容としての感覚された色」と「知覚された色（すなわち知覚された家の色)」,同様に,「感覚された粗さ」と「対象的な粗さ」,「感覚された広がり，形態や形の契機」と「知覚された空間的広がり，空間的大きさと形態」が区別されているのである。

では，この区別は何によるのであろうか。「赤」のような契機については,「感覚された赤は知覚そのものの実的（reell）な契機である。その知覚は赤の契機を含むが赤くはない」と説明されている。また,「広がり」についても,

「知覚は広がりの契機を含むが，知覚を広がっていると表示するのは根本的に転倒している」,「空間は事物性の必然的形式であって体験の形式ではない」と言われている。そして総括的に,「知覚された対象（たとえば知覚された家）は実的には超越的である」[8],「超越的に物として措定されているのと等しいものが知覚に内在しているわけではない」と表現されている。

すなわち,「感覚内容」は「知覚作用」の内実をなすという意味で「実的（reell)」であり,「内在的」であるが,「対象的特徴」のほうは「知覚作用」に対して「超越的である」（知覚作用を超えている）という点で両者は区別されるのである。

さて，以上のように両者は区別されるが，他方，それぞれの色や広がりの「感覚内容」と「対象の特徴」とは対応し合ってもいる。そうした対応を可能にしている積極的（ポジティヴ）な事柄は何であろうか。この点で注目すべきなのは「射映 Abschattung」という事態である。「射映」は，或る対象について見出される変わらない特徴のことではない。それは，遠近，光沢，濃淡，細部の肌理といった点で，刻々と変わりゆく「見え」ないし「現出」（Erscheinung, appearence）であり，その意味で，知覚「作用」という動的なはたらきに対応して，知覚の「実的な」契機をなすとともに，対象の色や延長の「射映」として，現に見えている対象の特徴や側面に対応するのである。だが「射映」自体は持続的な対象やその特徴ではないため，それが対象として知覚されるわけではない。そこで，やや逆説めいた言い方ではあるが，フッサールは上のように「赤の感覚は赤くはない」と言っていたのである。

知覚の時間的契機に関してフッサールの『内的時間意識の現象学』[9] を参照すれば，メロディーの音を聴く場合，一つ一つの音は消えてゆくが無になるのではなく,「過去把持 Protention」されている。その際，音の過去把持は音の「原印象」をそのまま保持することではないし，音を再び思い起こす「想起 Wiedererinnerung」でもない。このように，その変化のなかで過去把持される個々の音は対象ではないが，それと同様に物の刻々と変化する「射映」も，対象やその特徴ではないと考えられる。

色に関する以下の言葉は，そうした考えを裏付けるものとして理解されうる。

8　id. §14 (S. 43)
9　*Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins (1893-1917).*,Husserliana Bd. X., den Haag, Martinus Nijhoff, 1966.

「われわれは，知覚の内在的内容に注意するならば，黄の不断の射映（eine stätige Abschattung des Gelb）を見出す。そして，そのような射映が感覚されるときにのみ一様に色づけられた球が呈示されるという本質連関が成り立つということは明らかである」[10]。

また，遠近の変化によって「射映」は変化するが，これに関しても，「球が近づいたり遠ざかったりする際にわれわれは不断に新しい知覚をもつ。もし多様な諸知覚が，意識（それは，広がりと形において不変の同じ球だという）において統一を獲得するのであれば，感覚内部の広がりの契機は不断の変化を必要とする」（ibid.）と言われている。

こうして，「対象的諸規定の同一性は，諸感覚内容の変転や連続的変化と折り合うばかりでなく，その諸規定に関して必然的に要求される」（ibid.）のであるが，視覚に関して言えば，その「感覚内容」とは，不断に変化する「射映」のことであると言えるであろう。なお，「射映」（すなわち「現出」）相互の関連については小論後半でみることとする。

先にみたように，フッサールは知覚作用は「感覚内容」と「意味的統握」の契機を含むと言っていた。「感覚内容」は，「統握」されることになる素材を提供することによって対象を「呈示する」という意味で「呈示的内容 darstellende Inhalte」とも呼ばれている[11]。もし或る作用が「意味的統握」だけで「感覚内容」を伴わないとすれば，それは，顕在的に見えている面を備えていないため，知覚とはいえないであろう。他方，或る作用が意味的統握を欠くならば，「一つのもの」を知覚しているとは言えず，断片的な感覚的印象であるだろう。だが，フッサールも認めていたように「感覚内容」と別に「意味」が見出されるわけではなく，それらは一体をなしている。

例えばわれわれは或る感覚的な現われを「一枚の木の葉」として捉えるが，単にその言葉の意味を考えるのではなくそれを知覚している以上，緑色やしかじかの形が全体として「木の葉」と見られているのである。

この「呈示的感覚」と関連して，「呈示的知覚」と「自己呈示的知覚」の区別についてみておこう。上のように，「感覚内容」が統握されて「超越」的な物についての知覚が成立する場合には，その知覚は，それ自体ではなくほかのものを呈示するという意味で「呈示的知覚」と呼ばれている。だが，「感覚内容」や「統握」そのものが現われ，意識されている場合には，それらは「自己呈示的知覚」において与えられると言われる。その知覚においては，「感覚内容」が「現れている」，すなわち，「自己を呈示している」，と理解されているのである。

この「自己呈示的知覚」は，現象学の方法としての「現象学的還元」と関わる。「知覚」は，「単なる思念」や「想像」とならぶ「志向性」（ないし「意識作用」）の一つとみなされていた[12]。そしてその「志向性」とは，「意識作用」であるだけでなく，一種の「対象への関係 Beziehung

10　id, S. 44.
11　cf. id. §15.
12　cf. id. §4.

auf den Gegenstand」であるという特徴をもつが，「対象への関係」といっても，現象学においては，その対象が時間空間的世界のなかで実在する対象であるかどうか，また，それが感覚器官にどのような影響を及ぼしているかということは考察の外に置かれ（エポケー），それがいかに意識されているかということだけが，考察の主題となる。こうして，「現象学的還元」という現象学の方法は，知覚に関して言えば，知覚された事物などの対象についてではなく，事象の現れ方，そして，知覚作用そのものに注意を向けることであると言ってよいが，その際，知覚そのものは上でみた「自己呈示的」知覚において与えられるとされているのである。

前にも触れたが，この「現象学的還元」は『物と空間　講義 1907』の直前に「五つの講義」[13]——これは『現象学の理念』として公刊されている——で主題的に講じられ，「自己呈示的知覚」のあり方はこの方法と関連する重要問題である。だが小論では，この関連に立ち入る余裕はない。「呈示的内容」としての「感覚内容」や「統握」が外的事物の知覚の際に果たしている機能の考察に集中しよう。

三

以上では，知覚について，「同一物の知覚」を典型として考えたが，そこでの区分の枠組みを活かしながら，知覚におけるさまざまな変化と不変化，同一性と差異の分類をしておこう。

「感覚内容（射映）と統握からなる知覚作用」と「知覚対象」の区別を考慮して，「知覚における同一性と差異」を考えると以下の分類が可能である[14]。ここでは，知覚の作用が変化するか，対象が変化するか，また，どちらにも関連する身体が変化（運動）するか，ということが分類の規準となっている。

（1）知覚作用の変化・不変化。

知覚作用は「射映」としての「感覚内容」および「統握」からなるので，それらの変化・不変化，すなわち，「時間の幅の中で射映を含む変化」が起こる場合と起こらない場合がある。変化が起こらない場合にも時間的位相は移行するけれども，その間に「射映」が不変であり，対象は同じ側面で呈示されるだけということもある[15]。射映の変化に影響を与えるものとして，自己の身体の運動やそれに伴う自己の身体と対象との関係があるが，これについては（3）でみる。

また，自己の身体の運動はないが「対象の運動や変化」が射映や統握に影響を及ぼす場合がある。それは次の（2）に分類される。

13　この講義は，以下の表題で，のちに公刊された。*Die Idee der Phänomenologie Fünf Vorlesungen.*, Husserliana Bd. II., 1950, den Haag, Martinus Nijhoff.（邦訳，『現象学の理念』，立松訳，みすず書房，1965）

14　以下の分類は，上掲書 *Ding und Raum Vorlesungen 1907.* の§26，§42 にみられる分類をもとに整理し，考察を加えたものである。

15　この点については，本節（三）の末尾を参照。

(2) 知覚対象としての物や諸部分の変化・不変化。これについてはさらに以下の区分が考えられる。

(a) 視覚における色，触感覚における手触りなどの質の変化。

(b) 形，大きさなどの変化。

(c) 場所的変化つまり動き。対象の動きにフッサールはとくに「運動的 (kinetisch)」という用語をあてている。

(d) 物の「全体と部分」の変化。これは上の (a) ～ (c) の区分と重なる。

これら (a) ～ (d) の区分の関連をみておこう。

色と形の変化は連動し，色の差異により形が定まっている場合もあるが，必ずしもそうではない (様々な色に塗られた箱)。また，形の同一性には様々な場合があり，滝や川や電光掲示板の文字のように形のみが同一でその素材が変わる場合もある——さらに素材の変化が感知されることもそうでないこともある。また，一まとまりの外形ではなく模様のようなものも「形」といえよう——その際，壁表面の不動の模様のようなものもあれば，理髪店の目印のような動く模様もある。

これらを「全体と部分」という観点から見ることもできる。全体は同じ形であるが，さまざまな部分の形や質が変わるということがあり，また，(時計の秒針の動きのように) 全体は変わらず一部分のみが動くこともある。また，外形のみは同一であるが，質はすべて変わるということもある。また，ギブソンの例のように，飛行機の操縦士が滑走路に着陸する際に見るような，視野内で移り変わる風景の中での，着陸地点を中心とした，諸物体の流れの速度分布の一様性などもこうした例に数えられよう[16]。

再度ギブソンを援用するなら，視野は「入れ子状に」諸事物によって満たされているので[17]，視野を全体としてみた場合にも上のことが成り立つ。すなわち，視野全体は不変でありつつ信号の色のみが赤から緑に変わったり，大きな部分を占める壁が同一視されたままその手前にあるボールなどが動き，それが壁の一部を「覆い隠す」などの変化もある。さらには，すべてがあまりにも急激に変化して，視野全体を除き (a)，(b)，(c) のすべてに関してほとんど同一性が見出せないような場合，すなわち「知覚」が成立しない場合も想像しうるであろう。

(3) 上の二種類の変化に「交叉する」のが，「自我の身体に関連する変化」である。

(1) における物の射映の変化は主に自己の身体 (眼球も含む) の動きに依存する。

(2) における対象が動く場合についても，「身体の動きとの関連で対象が動く場合——たとえば，物をまわること，物に近づくことなど——もあれば，身体の動きとの関連なしで対象が動

16　J. J. ギブソン『生態学的視覚論』(サイエンス社，古崎他訳，1985 年)，135 頁の図 7.6 参照。(原著：*J.J. Gibson, The Ecological Approach to Visual Perception.* 初版は 1979 年)

17　ギブソンの上掲書，9 頁などを参照。

く場合もある」。そしてそれらは主体によって区別されているのが通例である。
こうした「自我の身体に関連する変化」は，たんに「変化」や「差異」に関わるだけではない。以下の文が示すように，そうした変化なしには「同一物の知覚」は不可能なのである。

「経験の統一の中で一つの知覚から別の知覚への不断の移行が遂行される場合にのみ同一性が与えられているとわれわれは明証性をもって語ることが許される。対象の同一性は，多様な諸知覚を連続的に結合する総合の統一に基づいてはじめて確証されるのである…」[18]。

さて，日常の大略的な分類を用いるならば，(2) は「客観的世界」における変化・不変化のことであり，それに対して (3) はそれを成り立たせている「主観的条件」とも言えよう。知覚のはたらきにおいてこうした区別がなされているということ，そして「主観的条件」が存在するということが重要である。

たとえば，対象の変化や不変化が知覚されるためには，中心部と周辺部で見え（の明確さ，鮮明さ，細部など）が違い，絶えざる視線の動きによってそれらを調節できる「視野」ということが成立していなければならない。また，遠近の変化が明確に表象されるためには「奥行のある空間」が成立していなければならない。自分の身体の運動は，それらの成立に関わると言える。さらに上の (1) ～ (3) のそれぞれに緊密に関わる時間的経過が存在する。まとめれば，「知覚における同一性と差異」の条件として，種々の運動感覚，視覚野の存在，身体全体と知覚領野（遠近変化），時間などの契機が必要なのである。

以上で，フッサールが「知覚作用」の内実と考えるものを検討し，知覚における変化と不変化の分類を試みた。フッサールは『物と空間　講義 1907』において，さらに詳細に「同一性と差異」の観点から知覚作用を分析している。多くの「射映」を通して物が知覚されるゆえに，(3) の「自我の身体に関連する変化」をひき起こす身体運動が重要性をもつのである。以下では，その身体運動を考慮して，「知覚における同一性と差異」について考察する。

ところで，上の分類の (1) によると「射映」が変化しないこともあるので，必ずしも「変化」が「同一性」の条件とは言えないのではないかという疑念が生じるかもしれないが，以下の文は，変化と無関係な同一性は現実には存在しないような「限界的事例」であるというフッサールの考えを示している。

> 「われわれが今まで考察してきた変化しない諸知覚は限界的事例であったし，理念化的虚構のような面をもっていた。というのは，位置や姿勢の変化，少なくとも［遠近に関連する眼球の］調整（Akkomodation）において動く眼差しの変化がないわけではないからである」[19]。

18　*Ding und Raum Vorlesungen 1907.*, § 44.
19　id. § 26.

四

『物と空間　講義 1907』第 4 部は「知覚対象の構成にとってのキネステーゼ的体系の意義」と題されており,「現出の多様における同一的な物の現象学的な構成」を自己の身体の運動およびその感覚との関連で考察することが目指されている。

「同一的な物」の構成には,「多様な諸知覚を連続的に結合する総合の統一」が必要であるとされているが，問題は，どのような身体の動きがいかにしてそれを可能にするかということである。つまり，上の統一が可能であるためには連続的な知覚過程のなかで，諸側面がまさしく「同じ物の」諸側面として把握されなければならないが，それを保証する身体の動きが求められている。そして，そのためにフッサールは「キネステーゼ感覚 kinästhetische Empfindung」という概念を使用したのである。

以前に見たように,「感覚内容」にもすでに，色や手触りといった質的契機のほかに「広がり」の契機が認められていた。だが，フッサールは上の統一のためにはそれでは不十分であるとする。

> 「視覚や触覚の延長的契機はなるほど空間性を描き出すが，空間性の構成を可能にするには不十分で，それは，質的契機が客観的に空間を満たす特徴の構成のために十分でないのと同様である」[20]。

そしてその不足を補うのが,「任意に終らせることのできる“眼球，頭，手の運動”における連続的な感覚の経過」[21] としての「キネステーゼ感覚」である。

こうして，たとえば眼における「運動の感覚 Bewegungsempfindungen」があらゆる外的事物の統握において本質的役割を果たしていることが暗示されているが，それらは，物の形や色の表象を提供するわけではない。それは,「自ら呈示するのではなくて,［形や色の］呈示を可能にする」[22] のである。

なおフッサールはこの箇所で，先の「運動の感覚」という用語は「動くもの」（動く物）の知覚に関係させられたり，心理学的な意味で理解されたりすることがあるという理由で，それに代えて「キネステーゼ感覚」という語を使うと述べている。本節でもみることになるその後の叙述や『イデーン　第二巻』[23] を参照すると，彼は，身体の動きに伴う感覚ばかりでなく身体を意志的に動かす際の感覚も含めてこの語を使っていると思われる。なお,「キネステーゼ感覚」という用語は，位置的な感覚と言ってもよい「端的なキネステーゼ感覚」の意味でも，その変化の際の〈変化するキネステーゼ感覚〉（「キネステーゼ的変化ないし経過」）の意味でも使用される [24]。

20　id, S. 160
21　ibid.
22　ibid.
23　『イデーン　第二巻』第 36 節参照。
24　*Ding und Raum Vorlesungen 1907.*, S. 161.

では，「キネステーゼ感覚」が「同一的な物」の構成に必要であるのはなぜか。たしかに，無秩序な身体運動やキネステーゼ感覚では統一的な知覚は不可能で，何らか統一的な仕方で視線を動かしたり，手を動かしたりすることによってはじめて物は統一的に現出するように思われるが，その統一的な身体の動きとはどのようなものであろうか。物は「現出」ないし「射映」を通して現れるのである以上，そこに含まれている事柄を検討するためには，物の「現出」と「キネステーゼ感覚」の対応をみる必要があるであろう。

フッサールはこの問題に取り組むために，性質や形の点で変化しない物の現われ，しかも眼球の運動だけが可能な場合の物の現われを例として考察している。なお，以下では，「K」は「キネステーゼ」ないし「キネステーゼ感覚」の略語，「b」は「像」の略語であり，「像」は「射映」ないし「現出」と同義である。略語に数字が付されている場合は，それぞれ個別の運動感覚や像であることを示す。またここでは，K_1 などのキネステーゼ感覚は，特定の位置に対応する「位置的な感覚」としてのキネステーゼ感覚を示す。

> 「まず，例えば t_0-t_1 の時間の流れの間キネステーゼ的眼球感覚 K_1 が一定である（客観的に言えば眼が静止している）ならば，この間視覚像 b_1 も一定のままである。次に K_1 が新しい時間間隔 t_1-t_2 における経過において K_2 に変わるならば，像 b_1 は b_2 に変わる。K_2 が K_1 に戻るならば，また同じ時間間隔において b_2 は b_1 に戻る。K の任意の変化はすべて一義的に b の変化を条件づける……」[25]。

こうして，静止している事物の現われにおいては，キネステーゼの契機と像の契機は，相互的依存関係にある。「等しい K 感覚において等しい像が，そして等しい像において等しい K 感覚が（対応する）」[26]。

以上で述べられているキネステーゼ感覚と像（ないし現出）を表に示せば以下のようになろう。

時点	t_0	t_1	t_2	
像ないし現出		b_1	b_2	b_1
キネステーゼ感覚		K_1	K_2	K_1

だがこの対応関係はいかなる関係なのであろうか。というのも，或る場合に特定の対応関係が成立したとしても，個々の K が特定の b にいつも対応しているわけではないからである。つまり，私が静止している物を見ているとしても，頭の向きを変えたりすれば，同じ K が今度は別の b と対応することになる。そこで，K と b はけっして「恒常的共存在」にあるわけではなく，一方が他方に決定的に属するものとして「経験的に動機づける」というかたちで関連づけ

25　id, S. 177.
26　ibid.

られているわけでもない[27]。

けれども，ここには何らかの対応が存在するようにも思われる。そこで，この対応関係について以下のように言われている。

「私はいま眼のキネステーゼ位置に際して視覚野の諸像の或る配置をもつとして，（静止している客体領野につねに関連して）いま領野の左半分に属している像 b′ を右半分の今はそこのある像 b″ の場所に産み出すような別の配置をもちたいと欲するなら，私はすぐさま，いかなる眼球運動を私が行わなければならないかを知るのである。像運動 b′⌒b″ の表象とともに私はただちにキネステーゼ的経過 K′⌒K″ の表象をそれに属するものとしてもつのである」[28]。

すなわち，下の左図のような視野内の現れの配置を右図のような配置にすることができる（ich kann）というわけである。

このことは視野内の任意の部分について成り立つので，まとめて以下のように言われている。

「あらゆる像を視覚領野のなんらかの任意の部分にもたらすような諸像の運動体系を追求するなら，私はそれに属するものとして，K の変化の体系を見出すのであり，あらゆる像ないしあらゆる像の配分には特定の K が属するのである」[29]。

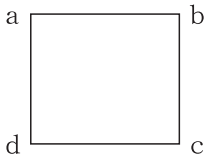
こうしてみると，次の文で示されているように，ここには K 感覚と個々の像との対応ではなく，K 感覚とそれらが位置づけられる「場所」および「場所の全体」への対応があるように思われる。

「どのように眼を保とうと，つねにあらゆる場所をそなえた視覚領野全体がそこにある。場所の多様は何か絶対に不変の常に与えられたものである。それはキネステーゼなしには決して与えられず，また，ただ変転しながら満たされる場所の多様全体なしにはキネステーゼは与えられない。そのかぎりにおいてわれわれは確固として決して乱されることのない連合を有しているが，それは一つのキネステーゼと一つの場所の間の連合ではなく，場所の広がり全体と“キネステーゼ一般”との間のそれである，…」[30]。

たしかに，上の対応は場所の多様とキネステーゼ感覚一般の対応であると言ってもよいようである。しかしながら，場所自体は像のように現出するものではないのだから，さらに，こうした「キネステーゼ感覚」と「場所」との関係はどのようにして可能になっているのかと問う余地があろう。換言すれば，ここで言われている「場所」とは何か，という問題である。それを考察

27　ibid.
28　id. S. 179.
29　ibid.
30　id. SS. 179-180.

するためにフッサールは，下の図のような正方形 abcd を知覚するの際のキネステーゼ感覚と諸像（現出）の関連を例として分析し，両者の対応関係を考察している。なお，f_a，f_b などは a，b などを凝視する際にえられる正方形の像（現出）を示す。



まず現出する像の相互関係が問われている。

「任意の静止している状況において，視野のなかで静止している正方形を考えてみよう。われわれは眼差しを動かし，場合によりそれを保持する。眼差しは例えば a を凝視し，次に，枠に沿って動きながら，b，c，d，a を凝視するように移動する。そうするとそれぞれの眼の位置には特定の前経験的な形［客観的事物ではなく現出としての形］が対応する。f_a は f_b，f_c，f_d に移行する。同時に K 感覚も，K_a が K_b，K_c，K_d へと不断に移動する。われわれは現象学的に，この不断の移行の中で f_a は不断に隣のものを“指示する”ということ，したがって諸志向は一連の f_a から f_d を貫通し，系列の進行において不断に充実されるということを見出す。われわれはこの諸契機に基づく貫通的な統一意識を見出す」[31]。

こうして f_a，f_b などの像の相互的指示関係の存在が強調されているが，上の図で読み取られる指示関係は，時間関係および K 感覚との対応しか示していない前頁の表には示されていなかったことに注意すべきである。この点が正方形の図で表されているのである。

こうした指示関係に対して「キネステーゼ感覚（K）」の系列にそうしたものは見いだされるであろうか。

「K の系列についてはまったく事情が異なる。それは相互に指示しないのであって，経過はするが，K の系列が f をもつという仕方でそれらを貫通する諸志向の担い手となるのではなく，それらを通過する統一の意識ではない。K の進行の逆転は，再び諸志向の流れを与えるが，それは，f を通過する。それは，f_d，f_c，f_b，f_a，を通過し，これらは相互に向かい合い照らし合って対しているが，K のほうはこうした際立ちなしに逆転して経過する」[32]。

つまり，ここには時間的関係しかないのである。たしかに K_1，K_2 などはそれぞれ固有性をもつこともありうるが，それらが明確に関連づけられるとすれば，それは上の f_a，f_b などのおかげである。

こうして，現出においては，「二つのまったく異なる機能の要素」が見出される。「キネステーゼたちは“諸状況”であり，f たちは“諸現出”である。諸状況の特定の変化には諸現出の特定

31　id. SS. 180-181.
32　ibid.

の変化が従うのであり，しかもそれは，それらの諸志向に流れ，充実，統一の意識を与えるのである」[33]。

ここで両系列について振り返ってみよう。両系列が関係づけられるために正方形の図のようなものが必要なのであろうか。

視線の移動に際して，一点を凝視した時に他の点が消滅することはない。そのため，先に注意したように，フッサールは図における場所の相互関係について語り，諸現出間の「指示」の関係について語った。これがなくて単なるK感覚だけが存在しても「個々の場所の同一性」は確立されないであろう。K感覚だけでは，文字どおり「場所は見えない」。だからその場合，場所相互の関係は把握されえないのである。

だが他方，キネステーゼ感覚がないとすれば，やはり場所同士の関係は考えられないであろう。キネステーゼ感覚を伴う眼球運動によって，「今はb”がある場所においてb’を見る」ということが可能となる。これによって視線の移動による「場所」の支配が可能になり，また，視野同士も関連付けられることになる。そしてこのことは，先ほどみた対象の諸部分や諸側面を関連づけること（場合によっては再度見ること）が可能になり，静止していて不変の正方形のような同一物の知覚も可能になるということにほかならない。こうして，キネステーゼ感覚に条件づけられて与えられる像の指示関係において，静止的「同一物」の知覚と「場所」が成立しているのである。

以上で，眼球の運動に関連するキネステーゼ感覚と場所の関係というもっとも単純な場合が考察された。つぎに，眼球の運動以外の運動やキネステーゼ感覚を考慮に入れることにより，視野の拡大がみられることになる[34]。

先ほどの例では，キネステーゼ感覚と像の多様が区別され，それらのなかで正方形という静止的対象が知覚されたが，正方形ではない（たとえば隣にある）対象を注視する場合にも同じことがその知覚について妥当する。さらに，多くの客体領野（Objektfeld）を考慮すると，同じように，キネステーゼ感覚と像の多様が対応づけられ，その際，たとえば頭の向きを少し変えれば，「同じ対象」（一本の樹木）も以前とは別の角度からの多様な「現出」を通して見られるということになる。こうして，それぞれの対象や対象領野においてキネステーゼ感覚および像の多様が対応づけられて正方形のみならず広範な「静止している対象」が構成される。

> 「〈像領野の様々な不変化と変化の多様〉のなかでの〈静止する客体領野〉の現象は，〈キネステーゼ諸感覚の連続性〉と〈像領野全体の連続性〉とを，それぞれ本質的に異なった特徴づけを用いて一義的に対応させる一つの現象である」[35]。

33　ibid.
34　cf. id. §52
35　id. S. 182.

こうして，視覚の「客体領域」が形成されるが，それに応じた「同一的な場所の多様」も構成されることになる。

以上をまとめれば，視野の拡大や関連づけに対応して，f_a，f_b，f_c，f_d にあたる違いが「像 Bild」の差異（まとめて「像の多様 Bildmannigfaltigkeit」）をなし，そして，それら全体が「像領野 Bildfeld」と呼ばれている。「客体領野 Objektfeld」は広範な像領野あるいはさまざま像領野の関連づけを通して設立される客体の集合や領野（前の例の正方形などの静止する客体の領野）と考えてよい。そして，それぞれの「像」には「キネステーゼ感覚」が対応していた。こうして，知覚においては，「像」と「キネステーゼ感覚」と「客体」という 3 つの領野，さらには「場所の多様」が区別されることになる。

こうしてキネステーゼ感覚と結びついた現出の多様の中で事物の知覚がおこなわれるということは，知覚が「差異」の中で「同一性」を設立するはたらきであるということを表している。以上を顧慮すれば，同一物を知覚するということは，或る映像のごときものが「眼」や「魂」に飛び込んでくること，また，知覚過程で或る像が結ばれることであるなどとは到底考えられないであろう。「同一物」を知覚することは，上のようないくつかの系列の「多様」の連関の中ではじめて起こる出来事なのである。

五

さて，知覚は「対象への関係」としての志向性の様態であった。また，知覚は何らかの一まとまりのものとして見ることであった。前節では，それを，キネステーゼ感覚と像現出，および，客体領域の対応関係として考察したが，こうした対応関係に照らした場合，「志向性」はどのように理解されるであろうか。またとくに，現出が体系をなし，キネステーゼ感覚によって条件づけられたものと理解されるようになったいま，第二節でみた諸「現出」（「射映」）と「統握」の関連はどのように理解されるべきであろうか。

キネステーゼ等を考慮した「志向性」の理解の試みは，『物と空間　講義 1907』の「第 10 章 キネステーゼ的に動機づけられた現出の多様の統一としての物」でなされている。そこではまず，キネステーゼ感覚や像現出が個々ばらばらの活動ではなく，全体として充実（対象の完全な現出）を目指す統一的意識であることが述べられている。もちろん，完全な現出が文字どおり達成されることはないが。

「すべてのこのような充実の連関のなかで，諸像は統一の意識，同じものであってそうあり続けている同じものの意識に担われている。そこでは，ここに属する諸現出は所属するキネステーゼ的状況の下で全体的類型の意味で充実される。この統一の意識は同一的に静止している事物を，諸像によって呈示されるものないし個々の現出において現出するもの，しかも，所属する

諸状況において法則に従って現出するものとして構成する」[36]。

次に，それらの統一は時間的位相を貫く統一であるということ，そして，それらにおいて「統握」の統一が形成されるということが述べられている。

「諸像とKとのそれぞれの顕在的に経過する二重の多様は，統握の連続性の統一によってまとめられるのであるが，この統握の連続性は，それぞれの時間位相に属する（K，b）を統握の統一へと関数的に（一つの現出へ）統一し，諸現出を時間的に流れ行く現出の全体へと統一するのである」[37]。

それでは，それぞれの時間的位相を結びつけるものは，何であろうか。その契機は「への志向 Intention auf」と呼ばれている。これは像現出に属するものとされており，それがキネステーゼ感覚に方向を与える。まとめて言えば，或る時間的位相での物現出が次の位相の知覚の仕方を方向づけ，身体的運動をともなってその位相の像現出を動機づけるということになるであろう。

「各位相における現出と時間的広がりにおける現出の統一は，b諸契機とK諸契機という二つの本質的に異なる諸契機をもつ。b諸契機は“への志向［Intention auf］”を与え，K諸契機はそれらの志向の動機づけを与える。“への志向”は，しかじかの仕方でこれらの状況Kにおいて差異化され方向づけられている。より正確に言えば，諸Kとまさしくこれらの Kの流れがその流れのなかで動機づけつつ“への志向”の種類と形式を規定する」[38]。

以下では，「への志向」の指示が次の位相のみならず，その先の位相をも貫通するということが述べられている。こうした過程全体のなかで，物のしかじかの統握や充実が遂行されるのである。

「b諸契機の各位相は，指示ししかも通り抜けて指示しながら次の諸位相，諸像を貫通するという仕方で，“への志向”なのである。それは，ここで自らを充実するが，また次の位相を貫きつつ自らを充実し，かくして，各bは充実であるとともに充実するものであって，これはもちろんその統握の機能によるのである」[39]。

その際，「Kの流れが K_0⌒K_1 であるならば，それぞれの変化の微小部分は，それに属する“への志向”の微小部分を動機づける」[40]と述べられているように，この位相的な流れはさらに微小部分に分けて考えることもでき，連続的である。

以上，「への志向」によって知覚の各位相が結ばれ方向づけられることを見てきた。こうした知覚の進行の中で諸感覚内容—すなわち諸像—「統握」が形成されるのであって，固定的静止的な感覚内容に外的に「意味的統握」が付与されるわけではないと考えるべきであろう。

ところで，志向性の全体を考えるならば，さらに以下の点も見逃せない。

---

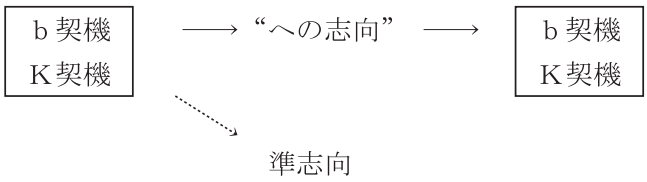
36 id. S. 187.
37 ibid.
38 id. SS. 187-188.
39 ibid.
40 ibid.

「そのつどの顕在的 b 位相は，……“への志向”のほかに，さらに**準志向**（quasi-Intentinonen）の庭をもつ」[41]。

この「準志向」とは実際には実現されないが，実際の志向であり得る志向ということである。知覚の進行は様々な可能性を含むが，その中の一つの志向が実現されるという仕方で遂行されるのである。

こうした，「準志向」をも含めた「知覚的志向性」全体は下の図のようにまとめられるであろう。

時間的広がりにおける各位相と「への志向」（統握の統一）



それぞれの位相において呈示は独立しているのではなくて，「準志向」という可能性もふくめて関連し合っている。「それらを貫通する志向は志向的複合体である」。それゆえ，「たとえ現出が変化しない現出であったとしても，それぞれにおいて充実の同一性の意識が生き生きと働いている」[42] ということなる。

以上，眼球の運動を中心としたキネステーゼ感覚と現出，客体の関連をみてきたが，もちろんキネステーゼ感覚にはいろいろな種類がある。頭部や首，四肢の動きもそれを伴うのである。そこで，フッサールは，以下のように，多様な身体運動に関連するキネステーゼ感覚相互の関連を体系をなすものとして捉えようとしている。

「従ってわれわれは，変項の複合体（K，K′，K″，…）をもつのであり，それは，相互に独立に変化しうるが，変項のそれぞれは常に特定の値をもつといった体系を形成する」[43]。

結びに代えて

こうして，われわれの知覚とは，驚くほど多様なキネステーゼ的な進行なのである。

最後に，キネステーゼの観点から「感覚内容」——これはのちに「ヒュレー（素材）」と呼ばれる——の在り方を見直す余地があることに注意しよう[44]。キネステーゼ感覚が「条件づけるもの」，「感覚内容」が「条件づけられるもの」であり，両者が時間的連続的位相において進行する

41　ibid.
42　id. S. 189.
43　id. §57「視覚領域のキネステーゼ的全体系」（S. 210）.
44　この点は以下の書を参照。*Ulrich Claesges, Edmund Husserls Theorie der Raumkonstitution*, Phaenomenologica 19, 1964, den Haag, Martinus Nijhoff. 特にその第 27 節。

志向性のなかに位置づけられるとすれば，それらは「意味的統握」を欠くものではないからである。だが，この点については，さらに，「内的時間意識」や「受動的総合」の観点からのフッサール自身の考察をも参照する必要があろう。

知覚は静止した画像の所有や描かれた物のように不変にとどまるのではなくて，差異をとおして同一性を目指す生動的な営みであることが示されたところで，筆を擱こう。

Identität und Differenz in der Wahrnehmung ——In Bezug auf Husserls “Ding und Raum Vorlesungen 1907”——

Masahisa OGUMA

Die Aufgaben der vorliegenden Arbeit sind phänomenologisch die Wahrnehmungsakten unter Gesichtspunkt von Identität und Differenz zu analysieren, und klar zu machen, wie die Dinge in der Wahrnehmung erscheint. Dazu wird Husserls Vorlesung “Ding und Raum Vorlesungen 1907” wird interpretiert.

Ich betrachtete erstens die Bedeutungen und die Verwendungsweisen der Wörter “Identität” und “Differenz”. Zwitens prüfte Ich Husserls Analysen des Wahrnemungsaktes. Das Ergebnis ist, dass man die mannigfaltigen Empfindungsinhalte als “Abschattungen” oder “Aspekte” interpretieren kann.

Dann versuchte ich die Klassifikation der Momente von Veränderungen und Unveränderungen in der Wahrnehmung zu machen, und zu analysieren, wie ein identisches Ding erscheint in Bezug auf Bewegungen des Leibes. Dabei wurden die Beziehungen der folgenden Begriffe analysiert : “die Kinästhetische Empfindung”, “das Bild (oder die Abschattung)”, “das ruhende Objekt”, und “das Ort”.

Und endlich versuchte ich den Begriff der Intentionalität zu interpretieren unter dem Gesichtspunkt von Kontinuität der Phasen der Wahrnehmungen.